

シルバー インフォメーション ルーム

神戸市東灘区本山北町6丁目2-13

電話(代表) 078(431)6008

FAX 078(431)6008

1999年4月10日発行

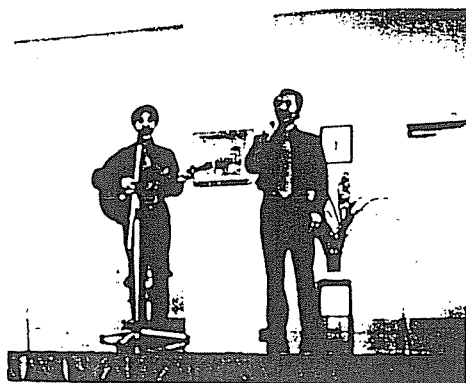
第 9 号

童謡歌手アゲインと出会う旅をして

中島 洋子

毎年秋になると、シルバー インフォメーション ルームのメンバーは、親睦、研修を兼ねて1、2泊の旅行にでかける。平成9年には、我々の活動に素晴らしい手漉き和紙の絵葉書を原価で卸ろして下さることで、多大のご援助を賜っている平井廣子さんを、長野県安曇野にお訪ねし、ついでに信州の美しい秋を満喫した。昨年11月には阿蘇、宮崎と九州に旅行した。

9月の終わり頃、NHKラジオから ギターの伴奏で、心にしみるやさしい歌声の唱歌「里の秋」が聞こえて来た。それが男性童謡歌手“アゲイン”の歌声であった。彼ら二人は、以前老人保健施設の職員であり、そこで、無表情で体も動かせないおばあさんに毎日、毎日童謡や唱歌を歌ってあげられた。そうしていたら、ある日ついにそのおばあさんが、彼らの歌に合わせて唇を動かし出し表情も出て来られたという体験談を聞き大変感動した。彼らはその後、阿蘇久野木村にある、歌手大庭照子さん主宰の日本国際童謡館の童謡歌手オーディションにパスし、トレーニングをつみ、珍しい二人の男性童謡歌手となられたのである。私自身もコーラスで病院や老人施設を慰問するが、やはり、童謡や唱歌が何処でも一番喜ばれるような気がしている。なつかしい歌を聞かれると、皆さん表情をはころばせ、一緒に口ずさんだり、手で振りをつけたり本当になごやかに楽しそうである。大庭照子さんをはじめとして、この日本国際童謡館所属の童謡歌手の方々は、こうして、平易ながら美しいメロディーと歌詞をもつ童謡唱歌を現代の子供達と、その若い両親たちに広めたいと演奏活動をされている。是非“アゲイン”や他の方々にもお会いしたく、急遽九州旅行を企てた。広大な阿蘇の外輪山と、今も煙りをたなびかす阿蘇山の麓の広い平野部は、雲一つない秋の柔らかい午後の陽に春霞に包まれたような、のどかな景観をかもし出し





阿蘇・草千里をたずねて

おもった。そこでお願いして当ルームの恒例の講演会に“アゲイン”を招き来る5月16日に歌とお話しをして戴く事となった。いつもとは味の違う、しかし大変良い催しになるのではないかと、メンバー一同気持ちを弾ませている。

ていた。外輪の山懐の林の中に建てられている童謡館で“アゲイン”と甲斐みずよさんが私たち8名のために1時間の童謡コンサートを開いて下さった。本当に楽しく、心にしみるコンサートであった。夕食前、我々の宿舎に訪ねて来て下さった“アゲイン”のお二人との歓談も、お二人の人柄が伝わる心温まるものであった。老人保健施設で働いていられた時のエピソードもお聞きし、私共一同こんな歌の数々とお話しを、是非、神戸の方々にも聞いて戴きたいと

〈永六輔講演会〉

平成7年に続いて2度目の永さんの講演会が、平成10年6月15日芦屋ルナホールで持たれました。

人気者の永さんの講演会は前回にもまして盛況で、笑いの渦の中にもしみりと心に響く言葉が織り込まれ、知らず知らず人生の機微を教えられた2時間でした。その中で、自分の老後をどう過ごすか、どのような介護を望んでいるかを考えたことがありますか、と問いかけられ、今の福祉行政は自分の最後を選べないほど貧弱である。自分の死の床での在り方を家で迎えるか、病院で迎えるか、或いはホスピスで等を選べるのが、どんなに人に親切なことで大事なことから、人の気持ちに添える事こそが真のホスピタリティーであると話されました。そして、介護保険が導入されても60%以上の地方自治体が、満足のいく対応はできないと回答しているそうです。自治体の

体制が整っていない状態では、私たちの老後は自分たちで守らなければなりません。自分たちの希望に添った老後を迎えるために、どうあるべきかを問いかけられ、深く考えさせられた時間でした。



ケース1 (80代夫婦) 相談者娘50代
母はパーキンソンで足が不自由であるが、何とか家事をこなしていた。父は買物に行っても思うように目的の品物を買えず苦勞していた。だんだん母の介護が必要になってきたが、父が一人で頑張っていた。そのうち、母はパーキンソンがひどくなり、入院することになり、さらに痴ほうもでてきた。入院先の病院では病状があまり改善されていない。父は胃癌と診断され、入院しなければならないが、拒否している。娘として心配しているが、仕事をもっており、なかなか世話をしあげられなくて悩んでいる。二人一緒に入院できるような病院がないだろうか。又退院後も二人で暮したいので良い方法を教えて欲しい。

《対応》

福祉事務所に行き、お母さんのために一応特別養護老人ホームの申し込みをされることをすすめる。近隣の病院のリストを送り二人で入れるかどうか調べて見られるよう話した。

退院後は、ホームヘルパー、デイサービスなどの利用と介護用品給付を福祉事務所に申請することをすすめる。

ケース2 (50代女性) 相談者娘30代
母は食事の支度や洗い物などができなくなり、若年発症型アルツハイマー病と診断された。病の進行が最初はゆっくりであったことや家族、本人共に精神科医療、痴呆への偏見と恐怖が大きかったため苦しんだ。父親が必死に介護しているがもう限界の様に思える。突然泣く、怒るなど情緒が不安定になり、夜中の頻尿、失禁、徘徊などのため父は眠れず酒量も増えた。徘徊もひどく近所にも知れる様になり、その度に父は介護のあらゆることで悩み苦しんでいる。ヘルパーなど他人を家の中に入れる事も受けつけない。これから病気がすすむなかで父のために何をどうすれば良いのかと、悩んでいる。

《対応》

きながにお父さんを説得し、デイサービス、ショートステイなど、積極的に地域のサービスの利用をすすめる。介護者の健康管理を周囲は見えてあげてほしい。またお父さんの介護に関する悩みを、ゆっくりと時間をかけて聞いてあげることも大切ではないかと思うと話した。

「痴呆老人をかかえる家族の会」が各地にあるので、誰か家族の方がそれに出席なさる事をすすめる。

☆ 老人問題相談室 ☆

シルバー インフォメーション ルーム

相談日・・・毎週 月、木曜日 10時～16時

電話・Fax・078-431-6008

どんな問題でもお気軽に電話、または来所してご相談ください。

無料で情報を提供したり、ご相談に応じます。



グループホーム

“櫻”では、6号で「老人保健施設」、7号で「ケアハウス」、8号で「デイサービス・デイケア」を取り上げてきましたが、今回はいま改めて注目されてきている「グループホーム」を特集いたします。

高齢者福祉の先進国であるスウェーデンでは、痴呆性の高齢者には少人数で共同生活をするグループホームの有効性は立証済みですが、日本においてはまだまだ数も足りないのが現状です。グループホームは、一人一人の居室と共同生活空間をもった小規模な住居で生活するので、スタッフの目も行き届きやすく、それによって痴呆の進行を和らげ、精神的に安定した生活を送ることができると言われ、今後ますます必要になってくると思われます。

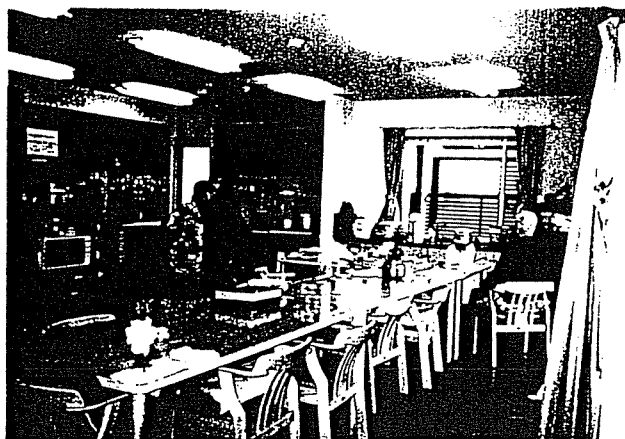
西日本は東日本に比べ数も少なく遅れていますが、神戸市では来年4月までに3カ所のグループホームができる予定になっていますし、その他の市にも出来つつあります。メンバーで分担して2つのグループホームに見学に行ってきたので、ご紹介します。

グループハウス見学記

1999年2月4日

尼崎市役所の前の広い通りを西へ入ると、平屋の木を基調とした建物が目にはいる。昨年10月にケア付き仮設住宅解消を目的として建設され、管理は尼崎市、運営は園田苑（特養）が委託を受けて行っている「グループハウス」である。

18室の個室と共同の食堂、団楽室、浴室があるが、9室ずつ二つのブロックに分かれ、オープンデッキでつながっている。個室には6帖の居室とトイレ、洗面所、押し入れが備わっている。食事は各自職員の手を借りて調理場で作り、食堂で食べる。職員はその他に掃除、洗濯、買い物、病院通院の付き添い等の手伝いをする。浴室は家庭用より少し広く、順番に一人ずつ入浴するのだが、それぞれ入浴したい時間がちがうのでうまくいっているとのことだった。各個室は濡れ縁から直接外へも出られ、開放的で、高齢



者が住みやすい長屋形式になっている。私たちのような訪問者にも気軽に話しかけてこられるし、オープンデッキでは、野菜の販売があり、近所の人達も買いに来て、外部との交流が図られている。計画の段階から園田苑の職員やボランティアが係わり、知恵を出し合って建設されたので、さまざまな所に工夫が見られ、これからのグループホームの参考になると思った。このグループハウスに入居で

きるのはケア付き仮設に居た人達だけで、期限も5年間だが、その後は壊したりせずに高齢者のために活用してほしい。一人で生活するのは不安だが、少し人の手を借りると大丈夫という高齢者が安心して暮らせるこのグループハウスのような住宅がもっと必要になってくるので今後数多くつくられることを望みたい。



神港園しあわせの家

グループホーム棟見学記

1999年2月8日

神港園しあわせの家は、特別養護老人ホームのなかに、一つの実験として小人数のグループで介護する方法を試みたグループホーム棟をもっている。

ここは「閉ざされた生活ではなく、人とのコミュニケーションのある人間らしい生き生きとした毎日を約束し、お年寄り各人の意志を尊重して、それぞれのゆるやかな自立を援助して」おり「家庭の延長線上の生活、普通の施設では出来ない充実した生活処遇」を目指してスタッフは頑張っておられた。グループの人数は10～12人で中度、重度の自立歩行の可能な痴呆性老人が集まり、それぞれ個室を持ち、共通の居間と食堂がある。食事のメニューや、起床、入浴、外出等の日課も各グループが自分たちで作作り、家庭的な雰囲気の中でゆったりとした介護で自立を目指している。

グループ棟は3階建てで、2階は中程度、1階と3階は重度の痴呆老人で、ワンフロアに2ホームずつあり、計6通りのグループ作りが出来る。中度のグループでは、10人の老人たちが昼食作り

をスタッフと共にしていた。野菜を刻んだり、皿を並べたり、或いはテーブルに着いてたり、なごやかな雰囲気漂っている。他のグループでも痴呆の程度によってさまざまで、スタッフの動きに無関心に座ったままの人や、周囲の事と無関係な行動をしている人もおり、グループホームを育てる難しさを感じた。

神港園しあわせの家では、入所者はまずグループ棟で生活を通して痴呆の程度、適応の度合いを見てグループ棟ならば何階に、或いは特養の棟へと振り分けている。家庭で介護することが困難な多動な痴呆性老人がグループホームの中では家庭の延長のリズムの中でスタッフにいたわれ励まされて、各人の意志を尊重されて、のびのびと快適に過ごしている。家庭に居るときは多分周囲から不安げに見られ、小言を言われ、叱られて、萎縮した生活をしていただろうから、彼らの居間に三々五々ゆったりと集っている姿は、本当に老人福祉とはどうあるべきなのかを考えさせられ、来年から導入される介護保険への不安を感じずにはいられなかった。

去る3月19日に神戸市東灘区内本山地域福祉センターに於いて「もといちプラザ」開設記念式典が行われた。「プラザ」とは、おおよそ小学校区単位で拠点をつくり、不安や悩みなどを抱えたお年寄りに対して住民がネットワークをつくり援助活動をする。即ち地域で援助を必要とする方が、安心して暮らせるまちをつくるための活動である。この日、記念講演された早川一光先生は、40年以上の医療従事者で、早くから京都西陣で閉鎖的であった痴呆老人の家を何度も訪問され、家族の痴呆に対する理解を深めると共に悩みの相談に応じて来られた。現在でも「住み慣れた地域で生活し続けたい」と願う多くの住民の支えとなっておられる。先生のご活動、プラザの趣旨にてらし我々の生活の中での原点を下記のように話された。

「共和、共鳴」 声をかけるという事と同時に話を聴き、一緒に悩み涙を流すことが大切。物事を解決しようとするのではなく、一緒に考える人が側にいる事自体が本当に解決することである。

「絆」 手をさしのべる、声をかけるのも大事だが、実際に手を握ると心が通じ合う。一人暮らしの人に、誰かれとなく声をかけること、これが絆をしっかり結ぶことであり、心を配り合うことになる。1000人訪ねて999人無駄であっても、たった一人の人が訪ねてくれることを望んでいたなら、それで良い。たった一人の出会いを大事にする。京都は震災、震災をまぬがれ長い間培ってきた路地の付き合いがあり、みんなが眺められ、見つめ合ってきている。悪く言えば干渉しすぎであるが、しかし、道を歩いていても困っている人を見逃さない。神戸でも「隣は何する人ぞ」と知らない顔するのでなく、常に気をつけて心を配っておくことが肝心。そのようなことを始めたら絶やさないようにする。そのためには無理をしない。日常生活の中で自然に声をかけ、絆を深めていくようにする。

「いきいき生きる」ということは互に行き来をすることでもあり、それはたまにするのでなく、しょっちゅうすることが大事で時間のない時には電話でもよい。年をとってからでなく、若いときから家と家のつきあいを大切にする。

「人間」 人が生きていくことは、人と人の間柄をうまくすることで丁度いい加減の間をとる、即ち近すぎではうるさいし遠すぎでは間がぬける。上手な間の取り方を保つことが大事。例えば城の石垣が、鉄筋の入ったブロック塀より強いのは、石が一つ一つ形が違い積み上げた時に隙間ができ、この隙間が地震で揺れたときも変化することにより、崩れるのを防いでいる。

「年をとる」 その人の体、行動は年相応のもので、いいよいいよと人を許すのが大切。年をとってオムツをすることがあたり前と思う。この場合「オムツをするほど年をとった」というのでなく「オムツをするほど長生きできた」と考える。歯が抜けることも噛み切れないもの、堅いものが消化できなくなったことであり、体のサインである。

人に助けを求める、互いに声をかけあうことで支え合うのが福祉である。

如何によく老いるかということと同時に、お年寄りに如何に良い手さしのべるかが大切。

シルバー インフォメーション ルームを開設して、本年6月で満6年になろうとしております。開設以前の約2年間の準備期間も含めて、当ルームの活動記録をご報告いたします。

シルバー インフォメーション ルーム活動記録 (1991年10月～1999年3月)

1991年10月 開設準備開始

1992年4月

- ・福祉学級H B L (Help for Better Living)として発足
- ・研修会(福祉関係者、老人関係の仕事の経験者などを招き学習会、介護研修)、施設見学(老人福祉施設、医療機関等)開始
- ・資料収集、作成を行う。

1993年6月 相談受付開始 6～8月 週1回 月曜日
9月～ 週2回 月、木曜日

勉強会 (講師を招いての学習会及び研修会、シンポジウム等に参加)

- ・「老人在宅介護の問題点」
- ・「訪問看護の現状」
- ・「福祉機器の選び方」
- ・「お年寄りの相談と援助を通して」
- ・「精神科医の立場から」
- ・「訪問看護の経験を通して」
- ・「高齢者の食事と食事介助」
- ・「“あんしんすこやか窓口”(福祉事務所)について」
- ・「痴呆性老人とその家族への援助の現状について」
- ・「高齢化社会と介護・・・これからの高齢者ケア政策」
- ・「高齢者の精神症状、その背景とケアの仕方」
- ・「神戸市の福祉施策について」
- ・「老人食の作り方と食べさせ方」
- ・「公的介護保険について」(一般公開)
- ・「震災後の神戸市の福祉施策について」
- ・「ボランティアのためのカウンセリング入門」研修会参加
- ・「阪神・淡路大震災2周年記念シンポジウムー高齢者の住まいとケアを考える」参加
- ・地域(神戸市東灘区)医療シンポジウム「痴呆と付き合い」参加
- その他多数

講演会開催

1994年4月 開設一周年記念講演会 会場:東灘区民会館「うはらホール」
講師:早川 一光医師「いきいき生きる」

1995年12月 第2回講演会 会場:神戸朝日ホール
講師:永 六輔氏「手をだずさえて」

- 1996年7月 開設3周年記念講演会 会場:神戸朝日ホール
講師:西川 きよし氏「福祉はわが家から」
- 1997年6月 第4回講演会・東灘福祉セミナー 東灘区社協と共催
会場:コープこうべ生活文化センター
講師:沖藤 典子氏「介護から始まる老いの変革」
- 1998年6月 開設5周年記念講演会 会場:芦屋市「ルナホール」
講師:永 六輔氏「永六輔の学校ごっこ・・・いつまでも現役」
- 1999年5月(祝)第6回講演会 会場:うはらホール
講師:童謡歌手“アゲイン” 歌とお話

機関紙“櫻”発行

- 1994年3月 第1号発行、9月:第2号発行、1995年6月:第3号発行、12月:第4号発行、
1996年7月 第5号 ”、1997年1月:第6号 ”、6月:第7号 ”、1998年1月:第8号 ”
1998年8月 “櫻”開設5周年記念特別号発行、1999年3月:第9号 ”

その他の活動

- ・相談窓口開設 1993年11月、1994年11月 阪急百貨店(塚本)ハートニングハウス
 - ・1996年7月 東灘区ボランティアセンターに於いて相談受付開始(毎週月曜日)
 - ・神戸市福祉バザー(於 神戸市しあわせの村 毎年10月)に参加
 - ・施設見学 「きのこエスポワール」(岡山県笠岡市)、海光園ミラホーム(特養)、神港園しあわせの家(特養)、ふれあいもとやま(民間デイサービス)永栄園(特養)、サルビア デイホーム、つくし園(特養)、大池サンホーム(特養)、ふじの里(特養)、デイホーム コスモス、三田温泉シルバーステイ(老健)、きしろ荘(特養)、いくの喜楽園(生野町特養)、ふれあいの郷「もくせい」(特養)、神崎老人保健施設、喜楽園(特養)、ななくさ白寿園(特養)、神戸市立西部高齢者介護センター、兵庫県立総合リハビリテーションセンター中央病院、適寿リハビリテーション病院、清和苑ゆうハウス(ケアハウス)、サンピラ三木(老健)、志染愛真ホーム(軽費老人ホーム)、伊丹やすらぎの館(有料老人ホーム)、サンピナス宝塚(有料老人ホーム)、青い空の郷(老健)、おおぎの郷(特養)、ローランド(老健)、志染愛真ホーム(ケアハウス)、ATCエイジレスセンター、ウエルハウス(老健)、あずさ(老健)、グループハウス、神港園しあわせの家(グループホーム)
 - ・家族交流会開催 (当ルームに於いて各月約1回、1995年震災後休止中)
 - ・講師として 各協会、新聞社、勉強会企画主催のシンポジウム、研修会、講演会のパネラー、(講師として主にルーム代表が出席)
- 受賞 神戸市市民福祉顕彰奨励賞: 1999年3月23日

多くの方々から、ご支援のお申し出を頂きました。厚く御礼申し上げます。情報提供活動に有効に使わせて頂きます。

賛助会員、ご寄付くださった方々

1998年1月1日~1998年12月31日

含田 祥子	赤松 恵美子	安居院 幸次郎	阿部 文枝	新居 欣造	新居 佐和子	飯尾 寛子
井門 衣子	井口 美千代	砂野 瑛子	石原 曉美	泉 公子	板垣 節子	一北 育子
伊藤 めぐみ	伊藤 幸子	いとう内科	伊藤 順子	稲岡 輝子	井上 敬子	井上 文字子
今竹 翠	今村 慶子	岩佐 康子	植松 純子	鶴飼 智江子	宇田 良子	内田 好子
采女 節子	江田 圭子	得原 輝美	追中 晴子	大井 幸子	太田 みち子	太田 明子
大槻 知子	大塚 綾子	大西 幸治郎	大西 富美子	大西 邦子	大橋 早苗	大村 静子
岡島 敬	岡田 清人	岡村 道子	岡村 羊子	岡本 涙子	岡本 晴恵	奥田 賀代子
奥村 幸一	奥村 博子	奥山 基子	栲木 タマ枝	小野嶋 文世	尾松 鈴子	小原 由久子
貝野 みどり	覚道 道子	掛井 喜美子	鍛冶 ますえ	梶川 芳江	梶本 正子	梶本 光義
梶原 小夜子	春日井 典子	片桐 峰子	片山 恵	片山 奈知恵	勝田 里子	加藤 和子
加藤 陽子	角山 明子	角屋 三重子	金川 千鶴子	加納 雅恵	上川 侑子	神谷 房江
加茂 富美子	川合 志津子	川北 律子	川手 三代子	川那辺 裕子	川村 嘉代	関谷 睦子
神田 英作	菊本 澄子	木住 雅彦	木田 悠紀子	木内 陽子	木下 恵美子	木下 陽子
君田 良子	木村 則子	経免 和代	草地 則子	国本 美恵子	久保 ミツエ	久保 幾子
倉成 信子	栗木 順子	桑原 圭子	小池 一子	小泉 たか	新井 雅子	児玉 道子
小林 繁	小林 美奈子	小松 美由紀	小山 武	今野 晴子	斎藤 哲子	阪田 明子
坂田 治子	阪本 富士子	さぎの病院	佐々木 幸子	佐藤 元枝	佐藤 道子	佐藤 武英
佐用 小枝子	沢野 良之	沢野 恭子	佐藤 和子	塩見 武二	篠田 光子	芝崎 信子
芝原 陽子	白石 清子	末田 わか子	杉江 祥子	杉山 峰子	角 光子	住野 昭
宗 義朗	曾根 正夫	其原 久美子	高井 和代	高雄 芳子	高瀬 静子	高野 ひろ子
高橋 嶺子	多賀 順子	竹内 多代	多胡 葉子	田中 治子	田中 泰子	田中 操
田中 厚子	谷川 千代子	玉川 和江	檀辻 嘉雄	千馬 秀夫	政 和美	塚本 恵津子
築本 佳世子	辻井 悦子	都築 いく子	堤 年子	津山 和子	寺澤 美香	東福 フミ
東福 静江	徳井 裕子	富田 博重	土井 小夜子	土井 弘子	中尾 朋子	中川 和子
中釜 真弓	中田 智恵海	中西 光子	中西 麻季子	中野 扶美子	中村 小夜子	中村 順子
中村 かぎえ	中本 秀子	中山 弘一	長澤 和子	永島 眺機	長田 隆子	長野 紀子
南原 順子	南部 多喜子	染川 アサコ	西岡 文子	西岡 利代	西川 澄子	西谷 寛子
西田 誠子	西畑 洋子	西部 明子	仁瓶 国子	沼田 久仁子	野口 すみ子	野澤 基能
野津 浩	野原 三保子	信政 勝	橋口 正子	橋本 重國	長谷川 信夫	長谷川 倫
阪神聖書研究会	坂野 恭子	鶴ひまわりの会	東本 公子	久田 哲也	久田 恒子	日高 悦子
平尾 幸子	福井 佳子	福智 盛	福智 艶子	福中 京子	藤井 房子	藤井 利啓
藤井 文子	藤崎 初音	藤田 則子	藤野 達也	藤原 順子	細見 成男	細見 睦子
堀口 淑子	前 幸子	前川 和子	前川 昭子	前田 知代	牧原 省三	正岡 常数
松井 久典	松井 忠子	松井 秀子	松浦 博美	松岡 政信	松岡 恵子	松本 圭子
松本 綾子	松本 たくみ	三浦 美子	丸山 多美子	三浦 春生	三井 紀子	峰村 桂子
三宅 田鶴子	宮地 病院	宮田 充子	宮前 享一郎	宮本 淳子	宮本 俊子	村上 悦子
村上 真理子	明倫会 藤原 幸子	森岡 喜久子	守山 穂子	柳谷 久代	山内 滋子	山口 凧子
山田 信	山田 奈加子	山田 久子	山田 真知子	山本 孝子	山本 喜久子	湯ノ恵 千代子
横山 薫恵	横山 かつ	吉川 明子	吉川 桂子	吉田 幸子	吉田 恒子	若菜 トキ
和島 祥子	渡辺 迪子	和田 二三子	和田 善光			(敬称略・アイウオ順)

当ルームでは皆様から寄せられた賛助会費で活動を行っています。

賛助会員費 : 一口 1,000円(一年)

郵便振替 : 口座番号 01110-8-54173

加入者名 : シルバーインフォメーションルーム



会計報告 (1998年度)

収入の部		支出の部	
賛助会費・寄付	757,190	櫻特別号発行費	647,735
公的助成金	958,000	講演会費	518,481
民間助成金	300,000	通信費	406,909
雑収入	364,130	事務消耗品費	333,820
前年度剰余金	6,398	賃貸料・光熱費	180,000
		備品購入費	124,740
		雑費	29,850
		剰余金	144,184
	2,385,718		2,385,718

1998年度は開設5周年にあたり特別会計を計上しました。



編集後記

桜をはじめいろいろな花々が咲き乱れる頃となって参りました。当ルームのある建物の屋根の上に大きく枝を広げる樹齢800年といわれる神戸市指定の名木「けやき」の木も、間もなく美しい若葉で覆われることでしょう。

昨年は、ルーム開設5周年記念として、“櫻”の特別号《高齢者介護の手引き》を出版致しました。そのため機関紙としての“櫻”9号を1年以上出すことができませんでした。介護保健の実施時期も一年後となり、さまざまな形で我々の関心を引くようになりました。私共も今までとは違ったご相談にも対応できるよう、勉強をせねばならないと思っております。他の先進国より数年遅れていると言われるこの国の福祉が本当に充実する時が、一日も早く来るように願って止みません。

この号では、当ルーム開設準備からの活動記録を掲載いたしました。多くの皆様のご支援とご協力で活動を続けて来られましたことを、改めて心より感謝申し上げます。

ルームメンバー一同皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

1999年4月